



随筆集

# 石膏色と赤

吉行淳之介

講談社

# 石膏色と赤

昭和五十一年五月二十四日第一刷発行

昭和五十一年七月十五日第三刷発行

著者 吉行淳之介

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―一二二 郵便番号 一二二

電話東京(〇三)九四五―一二一(大代表) 振替東京八一三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 藤沢製本株式会社



落丁本・乱丁本はおとりかえします。

© Junnosuke Yoshiyuki 1976, Printed in Japan

## 目次

石膏色と赤 9

いろいろの正月 13

郷里 17

ママカリ 21

級長の反省 23

ある温泉の記憶 25

テリエ館 31

「甲種合格」と「即日帰郷」 38

喘息の鬼 42

悪酒の時期 44

「驟雨」とその周辺 48

夢を見る技術 53

片方の靴 57

三島事件当日の午後 61

小川国夫覚え書 64

\*

別府・紀行 70

道後温泉の夜 78

\*

映画館の看板 90

外国の歩道で 92

花を喰う 94

葉書の書留 96

松葉杖の花売娘 99

アリストテレス手相学 101

高峰秀子さんの手相 103

チャプリンと七匹の猿 108

コリンヌ・リュシエール 111

スロット・マシン 113

着物 116

葡萄酒とみそ汁 120

冬の味 133

紅茶キノコ 135

\*

毒と薬 139

没（ぼつ） 146

テレビ談義 152

\*

新戯作派についての独断と偏見 158

「狂才」筒井康隆 164

原稿用紙 170

「陰翳礼讃」と「文章読本」 172

児玉隆也との最後の日曜日 180

けむりと灰 186

香水 192

パチンコ雑話 193

自摸る話 198

不思議な平和の三十年 201

大晦日 205

追悼・舟橋聖一 209

眼の変化 213

洋の東西 217

初出一覧 222

あとがき 224

表紙写真撮影 装幀  
大泉 拓  
若月英生

石<sup>せつ</sup>

膏<sup>こう</sup>

色<sup>いろ</sup>

と

赤<sup>あか</sup>



## 石膏色と赤

文学全集を本棚から持ってきて、ときおりいろいろな作家の年譜を眺めてみることもあるが、なかなか面白い。肝心なことは脱落しているにちがいないのは、自分の年譜を思い浮べてみても分ることで、年譜の行間を読んでみようとしても結局なにも掴めないが、それでも面白い。

川端康成でも五十歳のときにはまだ借家に住んでいた、と知ると、一昔前の作家の懐具合（つまり社会における立場）におもいが行ったりする。また、私の現在の年齢で、どの作家はどういう仕事をしていたか、と引き比べてみたりもする。あるいは、同年代作家の戦後の年譜を眺めていると、自分自身についての忘れていた事柄が思い出されることもある。

私自身の年譜についていえば、父母に連れられて東京に移住してきた年齢が、三歳になったり二歳になったりで不統一なことが気にかかっていた。

先日眠る前に、生れてから幾年目の記憶にまで遡れるだろうか、と思い出していると、意味あり気な一つの情景が頭に浮んだ。左側に線路があり、平行して広い道がゆるやかな勾配で高くなっている。その上り坂の途中の左側に、小さな駅の建物が見えている。私は祖母に手を引かれて

登ってゆこうとしたとき、正面の坂の向うの空で大きな夕日が沈みかかっているのが、眼に入った。

この情景は、「砂の上の植物群」の中に書いたとおもうが、そのあとは未公開である。それは隠していたわけではなく、その長篇の部分に嵌め込む場合に必要であったためだ。ついでに言えば、祖母の年齢をいま勘定してみると、四十歳をすこし過ぎたばかりで、ずいぶん若くて「おばあさん」と呼ばれるようになって、気の毒なことだった。

その夕日はひどく感動的で、立止まって茫然としていると、半ズボンの裾のところから兎の糞のような固い物体が転がり出た。祖母は大層怒り、訪問先の家に引返して後仕末をしおわると、また怒った。

そのときの自分の年齢について思い出そうとしてみると、幼稚園（五歳）にはまだ入っていなかったとおもう。しかし、その場所が山手線の鶯谷か日暮里かのどちらかだという記憶があるから、四歳くらいか。私の作品には、夕焼けとか落日がいろいろな形でしばしば登場することは、よく指摘される。このときの体験が根元にあるのか、と考えたが、それは違うことがすぐ分かった。茫然としたために肛門が弛んだわけで、その根はさらに深く、体験には求められないことなのかもしれない。

これが仮に四歳の記憶とすると、出京はもっと前になる。昔のそういう事柄を親にたずねるのは億劫なので、何年も前から気になりながら、そのままになっていた。今度、電話で母親にたず

ねてみると、父母は大正十三年末、つまり零歳の私を岡山に残して出京し、まず中野に住んだそうだ。十四年の一年間は、母親だけ美容師の技術を習得するために、丸ビル界隈に住み込んでいた。そのころ、叔父（父親の弟）に連れられて、私は何度もその場所に遊びに行ったそうで、そういうわねと臍げな記憶がある。しかし、それは具体的な形を取っていないので、一歳の記憶は残っていないと考えたほうがよい。

昭和元年は数日間しかなかったから、ここは大正十五年に繰り入れて、昭和二年につづくことになる。同年三月、母親は肋膜炎になって四十日間の入院生活を送るが、この期間に見舞いに連れて行かれたときの記憶が残っている。

連れていった女性が、私の横腹のところで、ねじを巻くように手をぐるぐる動かす。昔のゼンマイ式蓄音機は、まずそういう形でねじを巻いてから、動かしたものだ。そうすると、私は蓄音機とレコードに変化して、大きな声で歌をうたう。幼稚園に入ってから以降、三十五年くらいは鼻歌さえうたわなかったことと思ひ比べると、信じられない気分だが、その情景は覚えていて、二歳と三歳の境目に当るわけで、そのころは代々木上原に住んでいた。一年半ほどここに住み、渋谷の池尻に引越し、半年ほどで麹町の現在の日本テレビの近くに移った。渋谷の四歳のころの記憶は、鮮明にたくさん残っている。

二百メートルほどの近くの電信柱に雷が落ちたこととか、肩のところが痛くて一日寝ていると、祖母が怒って、

「ぐずぐずしているんじゃないんだよ、さあ、お風呂（銭湯のこと）へ行きましょー」

と、私の痛い腕のほうの手首を掴んで、引張り起した。その瞬間にガチツという音がして腕の痛さが消えた。それまでは関節がはずれていたわけで、スパルタ式といえは聞えはいいが、どうもこの祖母（死ぬまで、祖父と別居していた）はヒステリー気味であったようだ。

母親の記憶によれば、私は毎日裏木戸のところを出たり入ったりばかりしていたそう。木戸を出てどこかへ行くわけではなく、木戸を出てみたり入ってみたりという意味で、そういうことは自分では覚えていないが、その情景は孤児の振舞いのように物悲しい。

代々木上原のころの三歳の記憶も、いくつがあるが、渋谷にくらべてはるかに少い。「さあやん」という精神薄弱の乞食がときどき現れて、めしを食わせろ、と言う。茶碗に飯を盛って出すと、とめどなくおかわりをするので、家の者が、「さあやん、だんだん（もうそのくらいでストップ、という意味の方言らしい）」と言うのを覚えていた。

この場所で最も印象が強いのは、風景についてであることも、考えさせられる。駅を降りて丘を昇ってゆくと、そこに家があった。家の外へ出て眺めると、低いところに雑草の茂った原っぱがある。ここで、最も印象に残っているのは、夕方の原っぱの眺めなのだが、そこには夕焼けはない。当然、夕焼け空を背景にした野原を見ているに違いないが、それは脱落していて、記憶に出てくるのは、鈍い白い光が垂れ下るように漂っている下に拡がっている野原である。

その光におおわれた原っぱは、これまで何度となく私の頭の中に出てきていた。しかし、私が

ある時期に作品の中で好んで使った「石膏色」という単語に、その色がつながりがあるかもしれない、と気付いたのは、最近のことである。この白い夕方と私を茫然とさせ脱糞させた赤い夕暮は、いったい何なのだろう。

## いろいろの正月

歳月の流れには、区切りがあったほうがいいのか悪いのか。いまの時代では満年齢のシステムになっているから、一応誕生日が区切りになる。生活の面では、正月がそれに当たると言ってもよいだろう。いまの私は、区切りがあったほうがいいような悪いような曖昧な気分である。

子供のころには、やはり正月になるのをたのしみにしていたところがあった。「はやくこいこいお正月、お正月には風<sup>た</sup>あけて、独楽<sup>こま</sup>をまわして遊びましょ」という気分があった。正月は学校は休みだし、世の色どりが華やかになる。それに、屠蘇<sup>とそ</sup>と餅が子供のころには好きだった。屠蘇の香りも好きだったわけだが、アルコール分を子供が大っぴらに飲めるのは、正月だけだ。

雑煮が私は大好きで、休みが終わってから朝めし替わりに食べて小学校へ出かけていた。二月の末までその雑煮がつづいて、友人に話すと異常だと言われた。いまでは、餅を食いたいとお

もえば、一年中すぐに手に入り、これは季節感が失われてきていることにつながる。昔は、春には春の花が咲き、果物も野菜も春のものは春にしかなかった。いまは一年中だらだらとあって、そのかわり一つの季節を四倍に薄めたようなぼんやりした味がする。

日本の風土の特徴は、四季がはっきりしていることだが、近年ではへんに暖かい冬があったり、梅雨が長くて夏を感じないうちに秋がきたりする。春夏秋冬まで曖昧になっているので、「いまは正月ですよ」とはつきりさせたほうがよいようにおもう。

子供のころの正月についていえば、意外におもう人もあるかもしれないが、私にははなはだ不器用なところがあって、いくらがん張っても凧も揚がらないし、独楽もまわらなかった。その凧が、一度だけ盛大に揚がったことがある。帰郷して岡山市にある祖父の家の物干しで凧揚げをすると、とめどなく糸が繰り出されてゆくかたちになった。

凧は遠くで雑誌くらいの大きさに見えている。珍しいことなので、もっと糸を伸ばしたいのが品切れである。ただ、その凧は天高く揚がって強く糸を引っ張っているのではなく、地平に近い空に浮んでいるので、細いカタン糸を持ってきて凧糸につないだ。

おそらくすぐに切れるだろうと予想していたのだが、一生に一度揚がった凧だから、糸が切れて飛んで行ってしまうとかまわない、とおもった。ところが、糸巻の全部が繰り出されてしまい、凧はマッチのレッテルくらいの大きさになって遠くにふわりと浮んでいる。カタン糸にも太目のものがあるが、その糸はひどく細いものだったから、手繰り寄せるときに切れるだろうと考